

---

# ケ・セラ・セラ

ポンカス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ケ・セラ・セラ

### 【Nコード】

N2830M

### 【作者名】

ポンカス

### 【あらすじ】

森田君の元ネタは小学校時代の僕です。運動神経が良いとか、顔が良いとか、性格が明るいとかは完全に盛ってます。

吐いてはいけない溜息を吐いてしまった。どうしようもなく苦しくなったわけでもないのに、不意に吐いてしまった。蓄積した疲労が何か胸を押し付けて無理矢理吐き出させたような、そんな感じだった。塾の帰りに立ち寄ったコンビニでうるさい女共が雑誌コーナーの辺りにたむろしていた。金に茶のメッシュをいれて、厚い化粧に目元に銀紙みたいなものを貼っつけていた。キラキラ輝いて綺麗だとも思っているのか。馬鹿馬鹿しい、そんなことを思いながらジューズを買って出た。溜息はダメだ。心がしぼんでいく。父さんの受け売りだけど本当にそう思う。

僕の成績は伸び悩んでいた。特に理数系はてんでダメで、だけど親が望むような国立大学の入試には必須だった。父さんは医者だ。いつからだろう、少なくとも中学に入る辺りには僕にそれを継がせたいのだろうということを感じていた。現に中学受験もした。本当はそれでも遅いくらいらしいが、「小学生ぐらいは協調性を学ぶことも大事だ」とのことだった。母さんは専業主婦で、基本的に一人っ子の僕の教育方針は父さんが主導権を握っている。そして最近の父さんが口癖のように言うのは「医者がダメなら弁護士を目指せ」だ。別に父さんや母さんに不満があるわけではない。寧ろ愛されていると思う。第一志望の中学に入れなかった時も、父さんは残念そうな顔こそしたが僕を責めるようなことはなかった。いい両親だ。そう思う。だからこそ二人の期待を裏切ることが怖くて申し訳なくて僕はいつも胸に重石を乗せたように気持ちになる。

ぼんやりと前を見るでもなく見ていると、随分と家の近くに帰って来たようだ。街路樹を等間隔に植えてレンガを敷き詰めた道に白いコンクリートを流し込んで固定している。ここらへんが情緒をぶち壊していると思うのは僕だけだろうか。写真に見た遠くプラハの街並みを思った。レンガだけを詰めて構成したような橋を穏やかな

流れの川の上にかけて、音楽家が優雅に奏でる。綺麗つてのはこういうのを言うんだ。ピカピカさせれば良いつてもんじゃない。でも僕もミ―ハーだ、と言われれば反駁の言葉に詰まるのかな。

僕は外国を旅してみたい。それが夢、うん夢だ。そんな気持ちの現れか、僕は五教科で一番英語が出来る。バツクパッカーみたいに自由で気ままで、知らない風景をのんびり見つめ、知らない人間と笑い合ってみる。食べたことのない食事に苦い顔をしたり、目を丸くしてみたり。父さんにも母さんにも言ったことのない僕のささやかな願い。父さんに言ったら「外交官でもいいぞ」と言う顔が目に見えぬ。おじいちゃんも医者で、当時の医者と言えば今よりもつとエリートで、父さんはとても厳しく育てられたそう。父さんは子供の好きにさせたい気持ちと、自分と同じように成功して欲しいがためにあえて厳しくしなければいけない、そんな二律背反な内心があるんじゃないかと思う。抑圧される気持ちも、成功する気持ちもわかってるから。本当に良い父を持ったと思う。だからこそ言えない。

最初それは綿埃だと思った。黒っぽい灰色は夜の、大通りと言えど街灯だけしかない道の上ではそう判断するしかなかった。でも、視線を切りかけたとき、それは微かに動いた。鳥の雛だった。何の鳥なのかはわからない。黒い体に灰色はまだ生え始めたばかりの羽毛だった。面倒だな、と正直思った。辺りを何の気なしに見る。どういったわけか、いや今僕は住宅街の方に近づいていて、居残りで数字の羅列とにらめっこさせられていたんだからもう殆どの勤め人たちさえも家に帰り着いていて、人通りは少ない。不意に講師の明らかに不機嫌そうな顔が目に見えた。目を逸らした先の醜く膨らんだガマガエルのような腹さえ思い出してしまった。また溜息が出そうになって慌てて口を噤む。

木は新緑を実らせて、鼻腔さえ潤すような瑞々しい匂いを放ってい

た。小指の先が痛い。さつき幹を掴んだときに木の皮が食い込んだ。何で僕はこんなことをしているんだろう。こつてり絞られて身も心もクタクタで、僕の方こそ誰かに負ぶってもらって一刻も早く巢に帰りたいのに。制服の胸のポケットに確かな温もり。離ってこんなに温かいんだ。知らなかった。そうだな、生きてるんだよな。

「僕は自慢じゃないけど運動神経よくないからな？ 落っこちても恨むなよ？」

小さく声をかけてみる。パイと大きく返って来た。何だかちよつと嬉しくなる。今僕は良いことをしているんだろうか。ぐつと足に力を込め、幹を無理矢理足場にして、体を持ち上げた。

これが良いことだとするなら、きつと父さんの教育は成功だ。だって僕は真似をしたくなっただけだから。小学校の頃、森田君という同級生が居た。僕とは違って運動神経が良くて、顔立ちも良くて、勉強はてんでダメで、性格が明るかった。素行は悪かったんだけど、決して故意に人を傷つけるような子じゃなかった。そしていつもテストの点数ばかり気にして、人付き合いの良くなかった僕にも仲良くしてくれた。

森田君がいつかグラウンドに全校生徒を集めてやる朝礼で、校長先生直々に名前を挙げて誉められることがあった。「うちの生徒で素晴らしい生徒が居ました。五年三組の森田高輝君です」と始まった時には、失礼ながら内心とても驚いた。森田君は学校の帰り道、巢から落ちた鳥の雛を巢に帰してやったのだとその後続いた説明でわかった。

僕は森田君にどうして助けたのか聞いてみた。中途半端にませていた僕は、自然の生き物に人が介入することがフェアでないと思っただのだ。それは放っておけば、野良犬や野良猫のエサになって、それで逆に生きる命もある、なんて。森田君はなんでもないような声のトーンで、なんでもないような顔でこう答えた。

「だって可哀想じゃん」

森田君らしいと思った。短絡的でとても優しかった。僕には真似で

きないと思った。そしてその時わかった。僕も本当は森田君のような場面に遭遇したらそうしたいんだ。それが良いことだとか悪いことだとか、そういうのは抜きにして僕もそうしたいんだ。けど僕はただ必死になって善行をしていると他人に思われるのが嫌だっただけなんだ。僕はいつだってそうだ。自分がやりたいことを、やる前に、自分が他人にどう映るか、それをした後どうなるか、そんなことばかり考えている。

下から巢を見つけた枝に手をかけた。色んなことをぼんやり考えながら、でも体は必死で、いつの間にか登りきつていたという感じがした。やれば出来るじゃん。胸ポケットを目だけ動かして見る。すっかりおとなしくなっている。大丈夫かな。どこかで擦りつけてしまったのかな。そもそも普通に暮らしている雛鳥が人間の衣服の中に入ることなんてないんだから、きつと体に悪いんだ。早く帰してやろう。腕に力がこもる。いつの間にか左手の小指の痛みも気にならなくなっている。木の皮のゴツゴツした乾いた感触も、もうあと少しと思うと何だか感慨深いような気がするから不思議だ。そこでふと気付く。帰りもあるじゃないか。帰れるのか？僕は。木登りは降りる方が危ないって誰かが言っていた記憶がある。僕にしてはとても珍しいことだ。「その後」を考えていない。短絡的で優しいかもしれない。やれば出来るじゃん。きつと木の上の森田君も「その後」なんて考えていなかった筈だ。そして「大丈夫なの？」と聞かれれば、きつとこう答える。「何とかなるよ」なんでもないような声のトーンで、なんでもないような顔で。

枝の上に体を持っていくと、しがみつくようにして足で枝を挟んで座る。そのままズリズリと尺取虫みたいに先っぽの方に進んで行く。親鳥に攻撃されたり、枝が折れたり、漫画みたいな展開も頭の中にないでもないけど……

「何とかなるよ」  
呟いてみた。

巢には他にも雛が居た。ピイピイと見慣れない巨大な客に警戒が好奇か泣き喚く。そうか、お前は一人っ子じゃないんだな。胸のポケットから、大事に、大事に、雛を帰す。ふわふわとした手の平の感触と、手の甲のパリパリとした巢の感触。ゆっくりと手の平を傾けて、左手も添えて。汗が頬を伝っていく。もう汗だくだ。本当に何をやってるんだろう。

ふわりと、衝撃は最小限に、雛鳥は巢に戻った。

顔を横に振った。最近出来た高層マンションの、いつもより高い位置が見える。何階くらいだろうな。コイツが大きくなったらあそこまで飛べるようになるのかな。いや、もっと遠くまで。

「外交官……か」

小さな風が頬を撫でてくれた。わりに合わない褒美だ。だけど何だか悪くなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2830m/>

---

ケ・セラ・セラ

2010年10月13日12時03分発行